

院長挨拶

平成 23 年 4 月 1 日

片岡 慶正

1. はじめに一東日本大震災に際して

今般の東日本大震災に際して被災された皆様方に心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。われわれの病院も早々に DMAT（災害派遣医療チーム）の岩手県派遣と医療救援チームの福島県派遣をさせていただきました。

志を同じくする医療者として、過酷な状況の被災地で日夜医療活動にあたっておられる皆様にエールを送りつつも、われわれはこの恵まれた医療環境であたりまえのように日常診療を行わせていただける幸せに感謝いたします。映像で映し出される被災者の方々のお言葉から、人が人でありえる思いやり、心づかいそして感謝の念を共有できる動機付けを頂戴したと思います。人と人の“絆”の大切さこそが、『医療の原点』であると認識します。

2. ご挨拶と決意

院長就任 2 年目を迎えるに際して、決意を新たに一言ご挨拶申し上げます。昨年度は、職員各人がそれぞれの立場でプロ意識のもとに“もう一つできる”ことを合い言葉に、また組織としては“強い病院”を目指す目標を掲げました。強い連携すなわち診療科、職種を超えた院内連携はもとより地域医療連携に強い病院こそが臨床、教育、経営に強い病院であると考えたからであります。しかし、昨年秋の事務職員の不祥事にて市民病院の機能と信頼が大きく揺らぎましたが、市民皆様の暖かいご支援で何とか危機を乗り越えることができました。この場を借りて、篤く御礼申し上げます。

今後も市民病院の使命として、地域医療と政策医療の両面から市民の生命と健康を守る責務に邁進いたします。地域医療支援病院として急性期医療、救急医療、がん診療、難病診療はもとより高度先進医療を優しく、安全に、迅速に、的確に提供してまいります。

3. 本年度の病院運営方針

本年度は 3 年計画による病院改革プランの最終年度であります。国が定めた最終目標は経常収支の黒字化だけが評価の対象という厳しい内容です。昨年度の診療報酬改定で見たことは、“患者さまはもとより地域の市民に愛され、信頼される病院だけが生き残れる公式”であります。

医療の原点に戻り、『患者とともにある全人的医療』と『市民とともに歩む市民病院』のさらなるバージョンアップ、職員一丸となった“絆”とそれに基づく良質なチーム医療および新たな視点に立った病院イノベーションの遂行に努めてまいります。

4. 中長期展望に立った現在進行形の病院改革

同時に中長期展望に立って、次世代に胸を張って引き継げる持続可能な経営形態の模索から、本年度は大幅な組織改革を行いました。従来診療局、看護局、事務局の 3 局制から医療技術局を新設して 4 局制とし、若手医師をはじめとする医療人の人材育成を充実する目的から臨床研修センターを新設しました。役割分担の明確化と責任ある業務フローの

効率化を計りました。昨年度の消化器内視鏡センター設立に引き続き、急性期の脳卒中センター構築と現在新たな健診センターの施設拡充が進行中です。

時代にマッチした救命救急体制として24時間365日対応の“ER おおつ”をさらに機能強化しました。救急医療の現場にIT画像迅速診断システムを新たに構築し、時間外・休日対応であっても、この診断システムにより専門医と緊密な連絡の下に初期治療方針がよりの確かつ迅速に決定されます。緊急手術の必要性などの決定に大きな威力を発揮します。このように、今後も患者様にはより安心して最適な治療を受けていただく良質な医療環境の先進的整備に努めてまいります。

5. まとめ

患者様はもとよりご家族の皆様からも信頼され、選ばれる病院であり続けるために『市民とともにある市民病院』の理念を徹底し、人と人の“絆”を大切にする“結いの医療”に向けて職員一同精一杯努力していく所存であります。

皆様方のご支援を宜しくお願いいたします。

本年度の合い言葉：

“絆” きずな

昨年度の合い言葉：

“聴す”（ゆるす）：しっかりとよく聴くこと

“念う”（おもう）：心に刻む強い思い